最優秀賞

祖母のリハビリ担当

神奈川県 湘南白百合学園小学校六年　八尾 咲希乃

今年の春、私の祖母が脳こうそくを発症した。はなれて一人で暮らす祖母が救急車で運ばれたと聞いた時、あわただしく様々電話をかける母のなみだ声や仕事を早退して帰宅した父の様子を見てこれは、ただごとではないと思い、こわくてたまらなかった。

私は、祖母が大好きだ。おさいほう、お料理が上手で、いつだって私をはげまし味方でいてくれる優しくて明るい祖母。もしかしたらもう会えない？歩けない？しゃべれない？頭の中でいろいろな最悪な事がかけめぐった。すぐに祖母の入院先へ車をとばし、会えないことが分かっていても、外のまだ寒いちゅう車場からずっと病院の建物に祈っていたのを覚えている。幸い命を取りとめたものの、後遺症で祖母は以前のように歩くことができなくなってしまった。杖をついて、母と手をつないで歩く姿は奇妙で、一気に年寄りになってしまったようで悲しかった。

再発をくり返した結果、一人暮らしは限界となり、我が家で一緒に暮らすことになった。私ははじめ、大好きな祖母と一緒に暮らせるうれしさでいっぱいだった。でも想像していた楽しい生活とはちがった。以前のように一緒に出かけたりはできず、慣れない土地での不自由な暮らしに、祖母はとてもつかれていた。母はいつも介護に通院にいそがしそうで、前のようにつまらない話をできなくなってしまった。私も階段や段差のないルートをいつも無意識に探し、祖母が動くと緊張して見るようになった。がまんすることも正直増えた。

そんな祖母は私にいつも謝る。「ごめんね、めいわくかけて」とすまなそうになみだを流す。大好きな祖母の役に立ちたくて、喜んでもらいたくているのに、それが逆に負担に思われているのがつらかった。きっと私のモヤモヤした思いが伝わってしまっているのだと思った。こちらこそごめん…と思った。そして気づいた。祖母が安心して笑顔でがんばれるために私に出来ることは、日常生活の手助けではなく、私がふつうに祖母に向き合うことではないかと。はれ物のように、ていねいに気を付けて見守ることは祖母にとっては逆につらかったのかもしれないなと思った。今まで通りの私でいつものように接して、一緒に話しＴＶ番組に笑って、同じ時間を過ごす、とてもシンプルなリハビリが、私に担当できる何よりのプログラムなのではないかと考えたら、急に気持ちが楽になったようだった。私は医師でも看護師でも介護士でもない。でもだれよりも優秀な祖母のリハビリ担当になれるんだ！と。バーバ、一緒にリハビリ楽しもうね！